平成元年度予防治山事業の施行に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
― 三刀屋尾崎城跡 ―

1990月3月

島根県　三刀屋町教育委員会

平成元年度予防治山事業の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
正誤表

頁	行	誤	正
7	１０	「石心」	「石芯」 注 意

注意：奈良国立文化財研究所「平成元年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修『城館遺跡調査課程』－中世城郭概説－」で述べられた。

例　　言

1. 本書は、三刀屋町教育委員会が島根県木次農林事務所の委託を受け実施した、三刀屋尾崎城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した地番は下記の通りである。

島根県飯石郡三刀屋町大字古城 1,149、1,152、1,153、1,169

3. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体者　三刀屋町教育委員会
　　教育長　若槻喜吉
調査指導　宮沢明久（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長）
　　鳥谷芳雄（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）
調査員　大谷祐司（三刀屋町文化財専門員）
補助調査員　加藤陽一（三刀屋町文化財保護委員）
事務局　谷戸邦夫（三刀屋町教育委員会教育次長）
　　太田昌人（三刀屋町教育委員会社会教育係長）
　　稲田和久（三刀屋町教育委員会社会教育主任主事）
調査作業員　片寄幸吉　陶山栄一　高橋康郎
　　森山崇　渡部春一
調査期間　平成元年９月１３日～１０月５日

6. 発掘調査に際しては、島根県木次農林事務所と地権者の加本　幸、木村　功、白築眞一、星野友清の諸氏及び都間土建の御協力を賜った。また、検出遺構及び遺物の性格については、内田律雄（県教委文化課）、原　俊二（平田市教委）の両氏から助言、指導を賜った。記して謝意を表する。
7. 本文の執筆及び編集は調査員が担当した。
8. 地形図の方位は磁北を示す。

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の概要 …… 2

Ⅲ　ま　と　め …… 7

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1

第２図　調査区位置図 …… 2

第３図　調査区設定図 …… 3

第４図　調査区遺構図 …… 4

第５図　南西壁土層図 …… 5

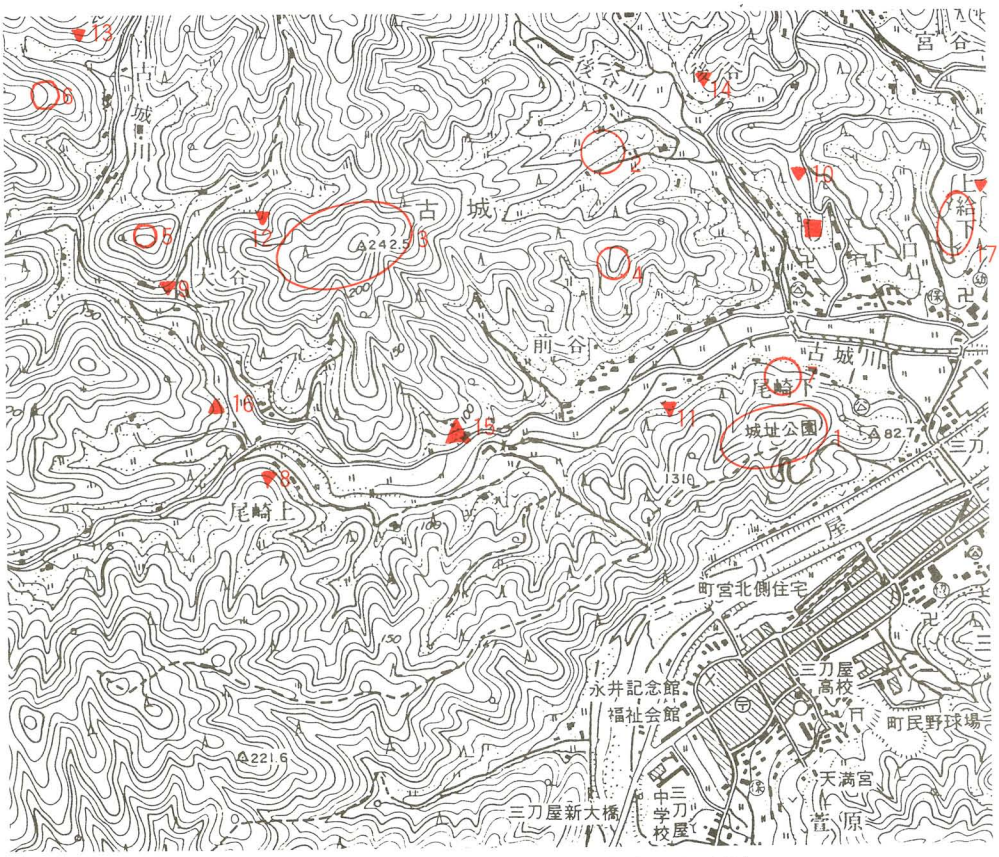
第６図　北東壁土層図 …… 6

Ⅰ　位置と環境

三刀屋尾崎城跡（１）は、三刀屋川の北岸、斐伊川との合流する地点から約三キロ上流の丘陵の先端に位置する。

城の主郭からは三刀屋川の両側に広がる穀倉地帯と三刀屋の町並を一望できる。また北東へ約１㎞の丘陵上には松本古墳群（１７）がある。

この城は近年の調査までは１３世紀に新補地頭としてこの地に移ってきた三刀屋氏（諏訪部氏）が、約３５０年にわたって居城としていたと考えられていた。しかし、８０年代にはいって本格的な調査がなされた結果、元屋敷城跡（２）、じゃ山城跡（３）の存在が浮かび上がり尾崎城跡が居城として本格的に使用されたのは戦国時代になってからであったことが判明した。これらの城跡の周辺には中山砦跡（４）、大谷砦跡（５）、鐘撞堂砦跡（６）、御蔵前館推定地（７）などが知られる。そのほかこれらの城砦跡の周辺には尾崎神子ケ畑古墓（８）、枝ノ前古墓（９）、久円寺上古墓（１０）、枇杷垣古墓（１１）、石曲り奥古墓（１２）、面田上古墓（13）、堂床古墓（14）などの古墓が点在している。このほかの遺跡としては金屎鈩跡（１５）、多々良谷鈩（１６）などが知られている。



第１回　遺跡の位置と周辺の遺跡（１:20,000）

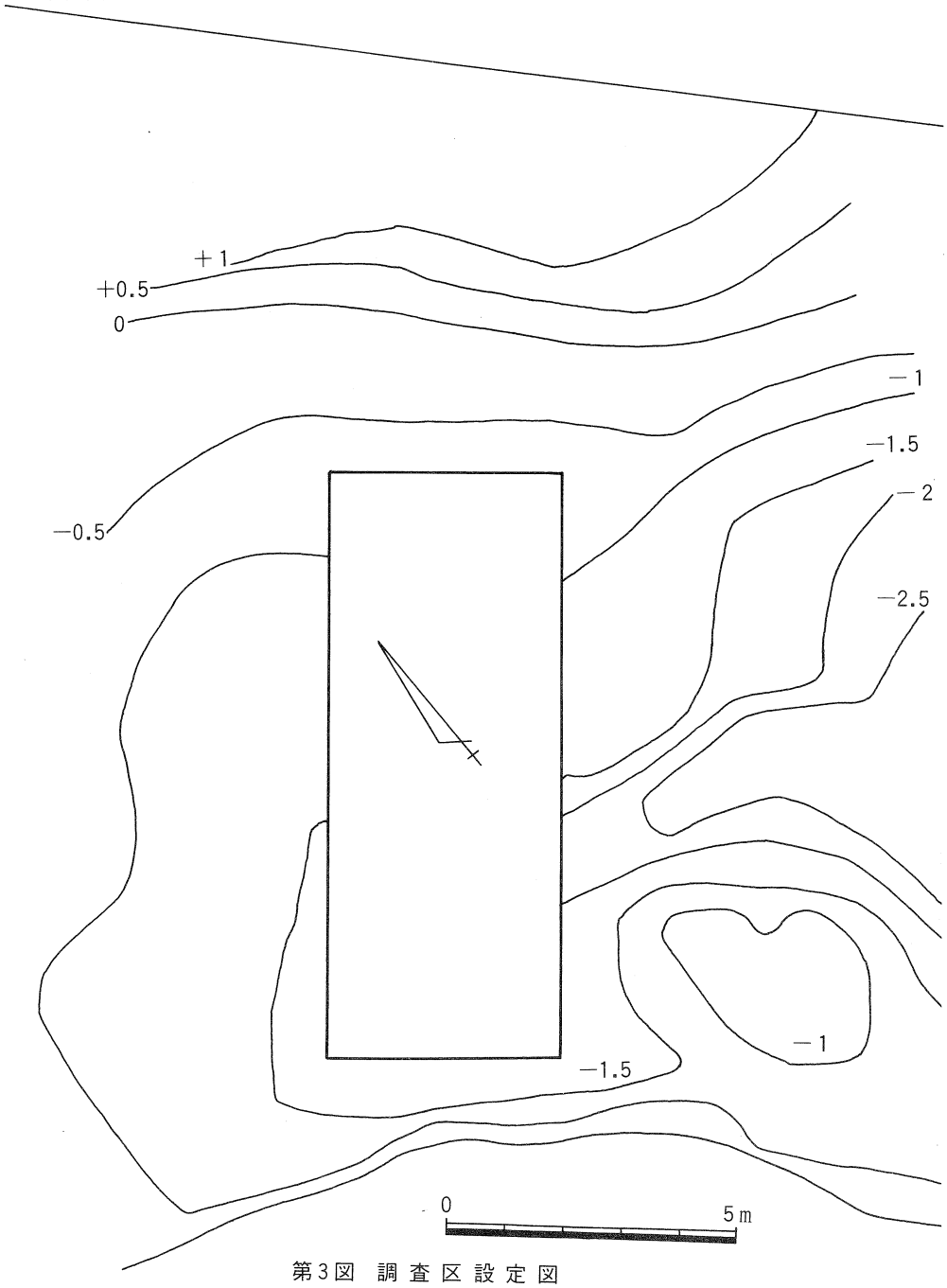
Ⅱ　調査の概要

調査区は、埋土がかなり堆積していると予想されたので調査予定範囲の10ｍ×７ｍに長さ６ｍ、幅４ｍの調査区を設定し実施した。

調査を始めるとすぐに北西側（上方）からの流水と、湧水が激しくなったので法面をつけ掘り下げ、１ｍ掘ったところで北西側に幅約１ｍの段を設けた。この付近で、１９６４年の豪雨災害の際流出した擁壁の残骸を検出した。さらに約0.9ｍ掘り下げたところ0.1～0.3ｍの大きさの石が北西壁から0.4～0.5ｍの地点から南東へ向かって1.5～１ｍの範囲にわたって広がり、約0.4ｍの厚さで堆積していた。この石群の範囲を確認するため調査区を拡張したところ、南東側で谷にほぼ直交する２ｍ×0.8ｍの石列を検出した。この石列は0.2～0.6ｍの石を使用し、前面が平になるよう意識して並べられており、南西から二番目の石は南西側の石と接する部分に繰り込みを入れ隙間をふさいだり、北東側では平石を立てて使用していた。またこの石列の後(北西)側は裏込の石が置かれており、先に検出した石群はこの裏込の石の一部であった。石列に直交するようサブトレンチを入れたところ石列の下層は叩き締められた粘質土が堆積しており、0.1～0.5ｍの石を少し含んでいた。また、石列の北東側は石列にほぼ直角に二列の石列が南東へ0.8ｍ延び、溝状を呈していた。これらの石列に使用された石材は大部分が花崗岩であったが一部では河原石が

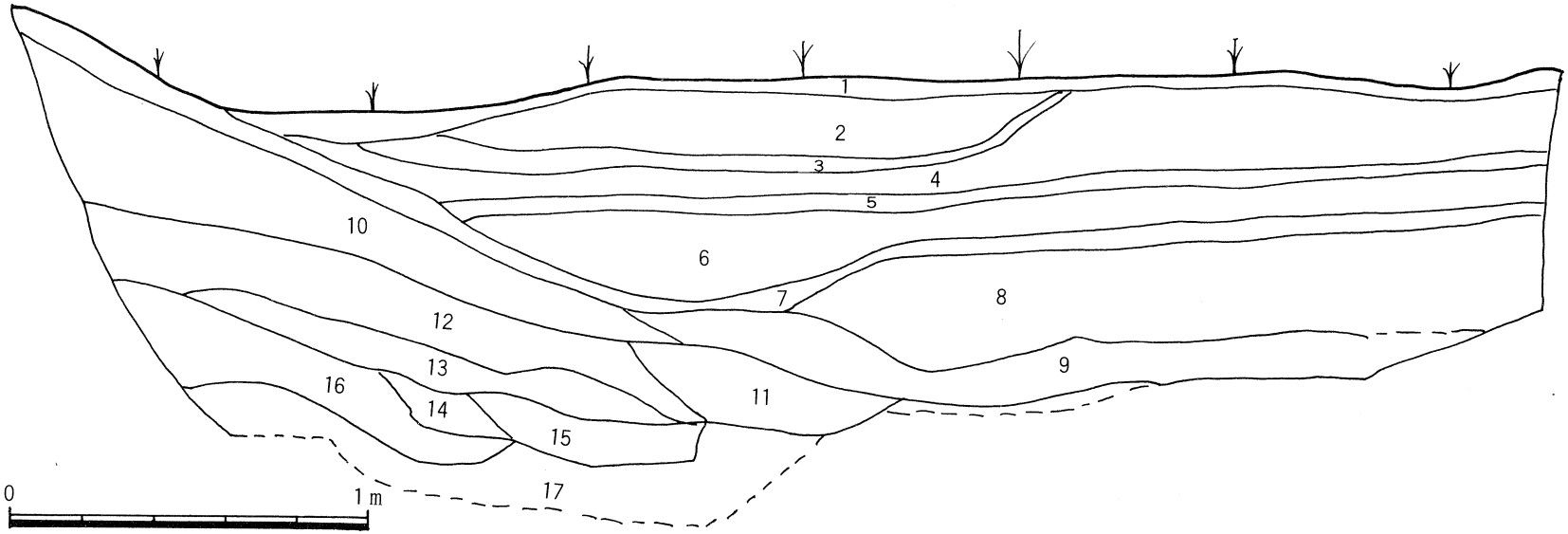
第２図　調査区位置図（1:2,500）

使用されており、特に裏込の石にはかなり河原石が使われていた。また、北東側にも多数の石を検出したが、北西側の石列と関連があると思われるものはほとんどなく、大部分が上から転落してきたものと思われた。石列や溝状石列の間や直上から若干ではあるが16世紀後半から１７世紀前半の陶磁器片及び土師質土器片、近・現代の陶磁器片を検出した。石列下層の粘質土層からは１６世紀後半から１７世紀前半の陶磁器片及び土師質土器片を若干検出した。



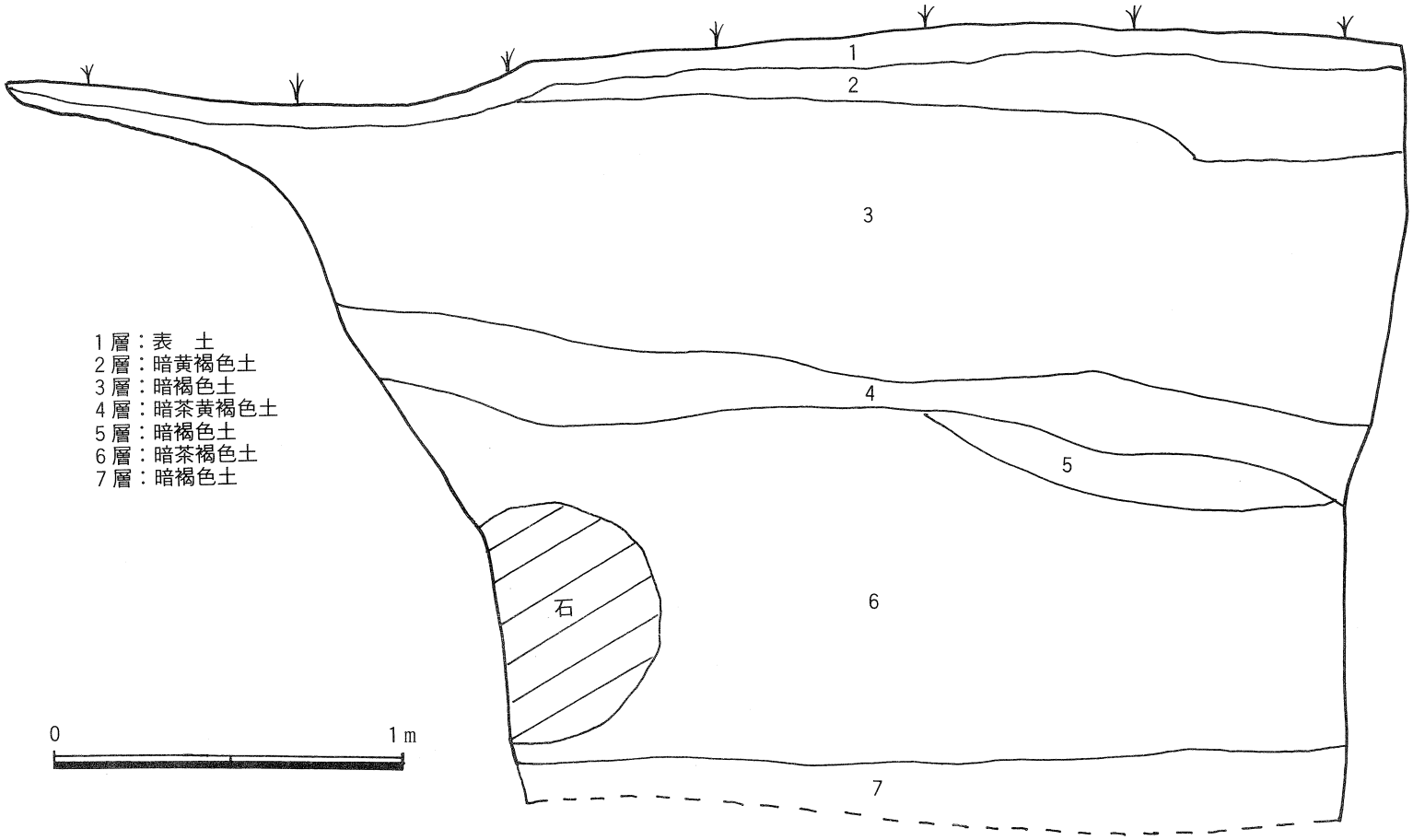
第3図　調 査 区 設 定 図

第4図　調査区遺構図



1層：表　土
2層：暗淡褐色砂
3層：暗褐色土(旧表土)
4層：淡褐色砂
5層：暗褐色土(旧表土)
6層：淡褐色砂
7層：暗褐色シルト(旧表土)
8層：淡褐色砂
9層：青灰色粘土
10層：暗褐色土
11層：暗茶褐色砂
12層：暗茶褐色土
13層：暗褐色土
14層：暗褐色土
15層：暗褐色土
16層：暗灰褐色土
17層：暗褐色土

第5図　南西壁土層図


1
2
3
4
5
6
7
石
1層：表　土
2層：暗黄褐色土
3層：暗褐色土
4層：暗茶黄褐色土
5層：暗褐色土
6層：暗茶褐色土
7層：暗褐色土
0
1m

第6図　北 東 壁 土 層 図

Ⅲ　ま　と　め

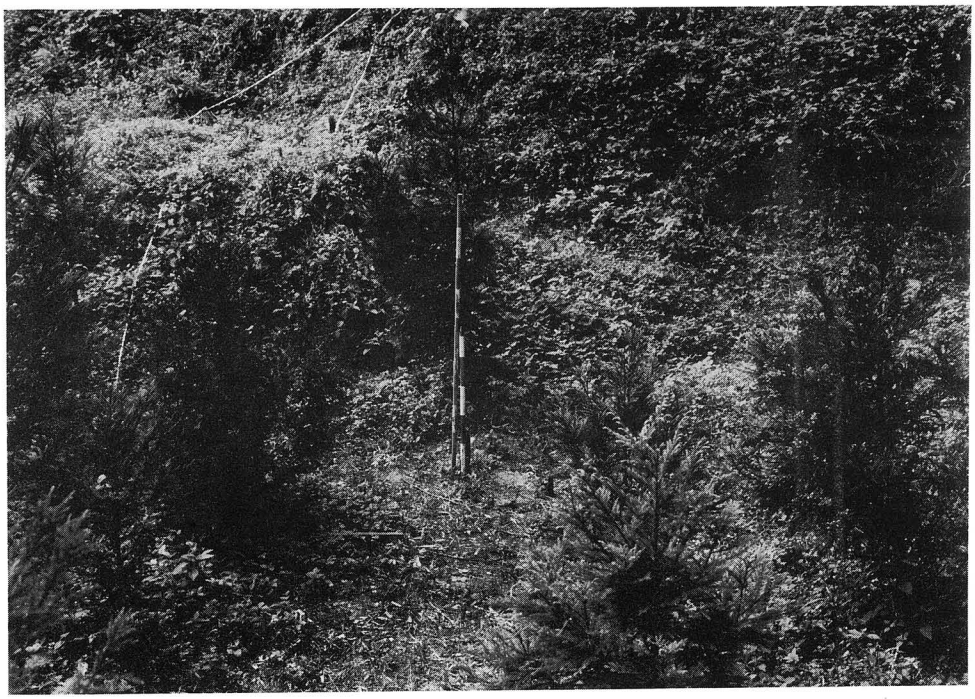
石列は、叩き締められた粘質土層の上に築かれ、裏側を裏込の石と粘質土を叩き締めた堅固なつくりになっていた。このため、水害等で破壊されることなく今日まで残ったと思われる。但、調査区周辺は１９６０年代ごろまで畑であったため遺構の上面は後世の削平を受けている可能性もある。石列の北東側で検出した二列の石積みは石列に伴う側溝と思われるが、真砂土の上に築いており前後の欠損部は水害等で流失したと思われる。

石列の用途は断定できないが、次のようなものが想定できる。①調査区付近は流水・湧水がかなりあるので堤などをつくり水飲み場としていた。②堅固に叩き締められていたので上に建築物があった。③城山に上がる石段であった。このほか、最近村田修三先生が提唱されている「石心」の一種とも考えられる。

石列が作られた年代は、①石列に直交して入れたトレンチ内から１６世紀後半から１７世紀前半の遺物しか検出しなかったこと。②石列の間から検出した近世以降の陶器片は比較的上方から検出していることや、石積みの間から検出した近世以降の白磁片は覆土が真砂土であったことなどから、いずれも流れ込んだ可能性が強く時代判定の資料にはならない。以上のことから石列は１６世紀後半から１７世紀の前半にかけて築かれたものと思われる。当該期は、三刀屋氏が去り、毛利氏、堀尾氏によって城山の大改修工事が行なわれた頃であり、尾根上の主郭に石垣が築かれた時期に当たる。また、調査区のある谷の入り口付近は「大門口」等の地名があり大手口だったと考えられており、ここから調査区のある谷間を通って城山へ上がった伝承がある。山城の裾部の調査例はあまりなく、今回検出した石列の性格付けは類例の増加を待って再検討したい。

参考文献

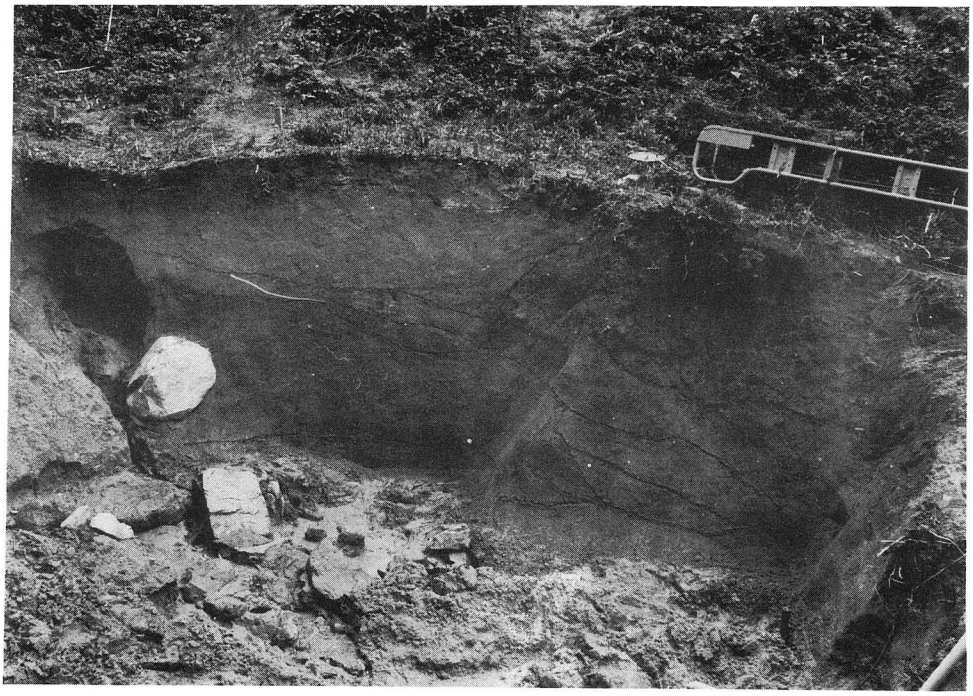
三刀屋町教育委員会　『三刀屋城跡調査報告書』Ⅰ　１９８２
三刀屋町教育委員会　『三刀屋城跡調査報告書』Ⅱ　１９８３
三刀屋町教育委員会　『三刀屋城跡調査報告書』Ⅲ　１９８４
三刀屋町教育委員会　『三刀屋氏とその城跡』　１９８５
村田修三編　『図説中世城郭事典』　新人物往来社　１９８７



調 査 前（北東より）

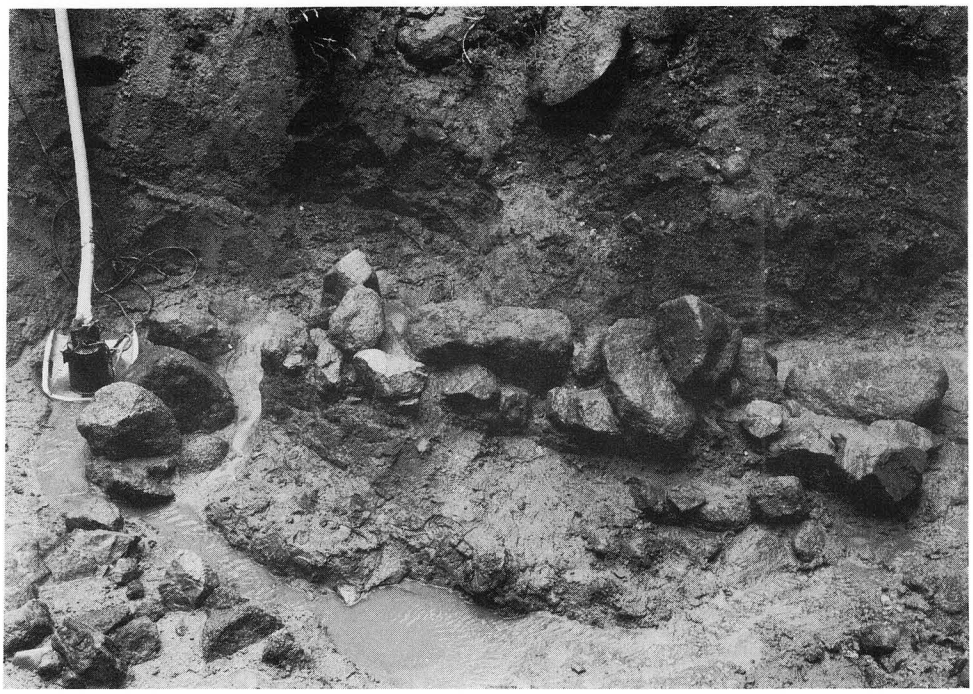
南 西 壁 土 層

図版 2



北東壁土層

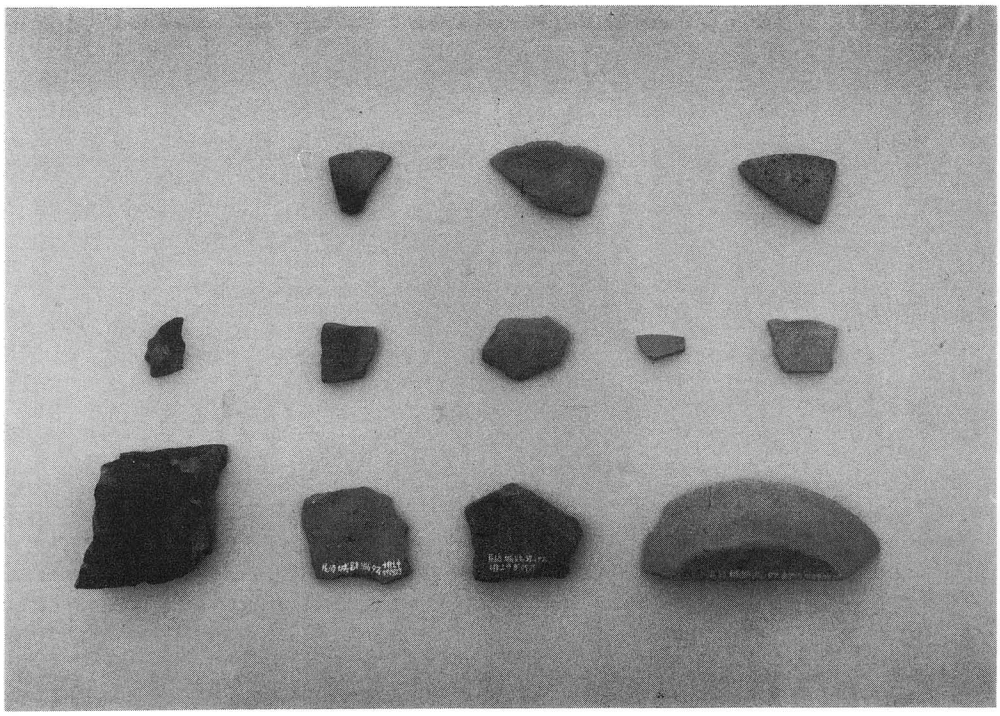
石列遺構（南東から）



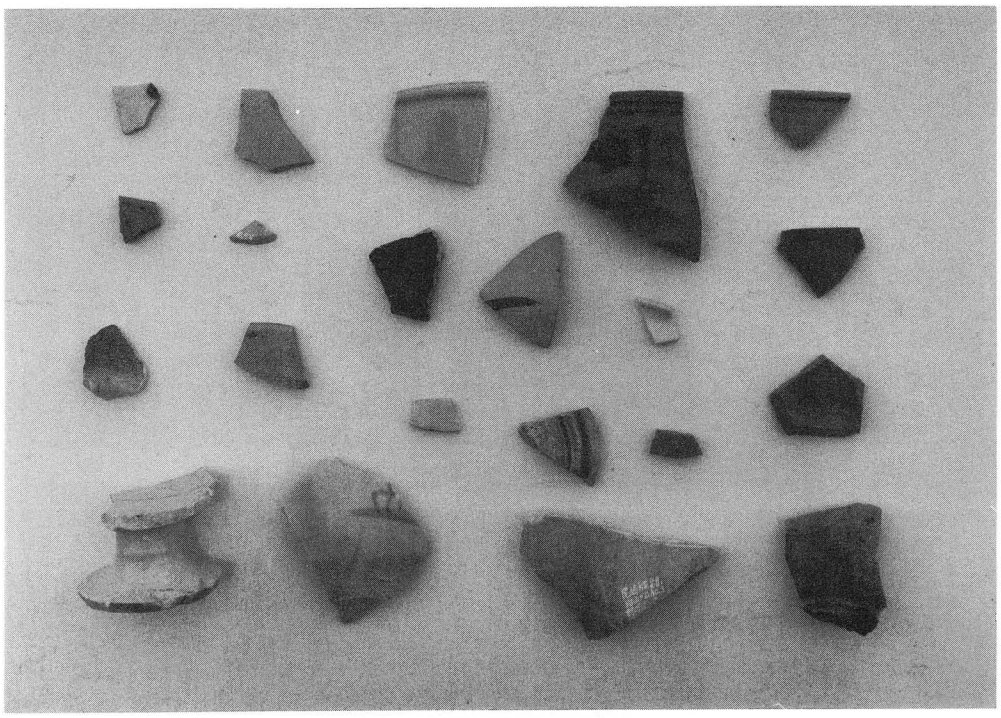
石列遺構（北西より）

石列遺構 くりこみ

図版 4



出土遺物（1）



出土遺物（2）

平成元年度予防治山事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
— 三刀屋尾崎城跡 —

1990年3月

発行　三刀屋町教育委員会
島根県飯石郡三刀屋町三刀屋

印刷　㈲木次印刷
島根県飯石郡三刀屋町三刀屋